

# 道徳学習指導案

指導者 広島市立〇〇小学校  
教諭 〇 〇 〇 〇

1 日 時 平成21年11月〇日

2 学 年 第5学年〇組

3 主題名 公正・公平〔内容項目4－(2)〕

4 資料名 「ルールブックにはないルール」(自作資料)

新聞記事「ウェブ」(朝日新聞 平成15年3月12日付)及び、  
Web ページ「[114の金物語](82)柔道・無差別級 山下泰裕」(MSN 産経ニ  
ュース 平成20年7月27日付)等を基に作成。

5 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値

人間は社会的な存在であり、家族や学校をはじめとする様々な集団や社会に属して生活を営んでいる。集団や社会の中で、多様な人々が心地よく安心して生活するためには、規範やモラルが必要である。しかし、既存のきまりやルールが、それらの全てを網羅しているわけではない。実際には、明文化された決まりやルールが無い中で判断しなければならない場面も多い。

本学習で気づかせたい内容項目「公正・公平」は、利己心がなく、わけへだてなく、堂々としていることであるととらえている。この価値は、明文化されたルールが無い場面でも、よりよい判断をし、行動するために必要な価値基準の一つであると考ええる。

(2) 児童の実態

本学級の児童は、明るく元気で仲が良く、友達のがんばりや良さを素直に認め、励まし合える良さをもっている。しかし、まだ大人のを頼ることが多く、自分自身で考え、公平に判断し、適切な行動をすることができない児童も多い。

「きまりやルールは守らなければならない」、「大人のいうことは聞かなくてはならない」と考えている児童は多いが、なぜきまりやルールが作られたのかということまで考えられる児童は多くない。きまりやルールが無い場合や、指示が出ていない場合には、利害関係や人間関係に引きずられ、公正・公平に考えたり、行動したりすることができないことが多い。

本時は、実話に基づいて作成した自作資料を手がかりにして、スポーツ競技におけるルールの基盤となっているフェアプレーの精神、公正・公平の精神について気づかせ、考えを深めさせていきたい。

### (3) 資料について

本時は、まず展開前段で、サッカーの試合に関する自作資料〔資料Ⅰ〕を用いる。この資料では、ルール上は反則行為ではないが、「治療時間を与えるためにわざと出されたボールは相手に返球される」という暗黙のルールを破ってシュートをしてしまった選手の行為と、そのチームの監督による決断を取り上げている。

次に授業後段では、ロサンゼルスオリンピックの柔道決勝戦での出来事を紹介した自作資料〔資料Ⅱ〕を用いる。この試合では、軸足である右足ふくらはぎが肉離れになった山下泰裕選手に対して、対戦相手のラシュワン選手は、ねらえば有利になるはずの山下選手の右足をねらわずに戦った。結果、ラシュワン選手は敗れたものの、その行為を賞賛され、ユネスコからフェアプレー賞が贈られた。

この二つの事例を通して、「ルールブックにはない暗黙のルール」について考えさせ、スポーツ競技におけるルールの基盤として「公正・公平」の精神があることに気づかせたい。

### (4) 表現し考えを深めるための工夫

児童が自分の思いをしっかりと表現できるようにするために、まず、自分の考えを持ち、それを整理するためのワークシートを用いる。このワークシートに自分の考えを記入させた後、小グループで意見を交換し、さらに全体でも意見交流を行う。そして、終末に振り返りをする中で、自分の考えを深め、まとめていく。

このような指導過程を組むことにより、児童一人一人が自分の考えをしっかりともち、それを表現するとともに、友達の意見を聞きながら、自分の考えをさらに深めていくことができると考える。

また、共通する価値に係る二つの資料を扱い、順に、それぞれの人物に対する考えをまとめ、表現させながら、自分の考えを深めさせたい。

### (5) 事前事後の指導

事前指導：9月には本授業の内容項目と深く関わる「規則の尊重 4－(1)」についての授業「シンガポールの思い出」を行った。

事後指導：「公正・公平」の概念は広い。今回は子どもたちにとってなじみのあるスポーツを取り上げ、「公正・公平」の大切さについて気づかせる。今後は、思いやりについて考える授業や「いじめや差別」をもとに、正義や「公正・公平」について考える授業も行い、生活一般における「公正・公平」の大切さについても考えさせていきたい。

また、スポーツ競技のフェアプレーに関するポスター等を教室に掲示し、児童の日常の生活場面に、道徳の時間に考えたことが生きるように工夫したい。

## 6 ねらい

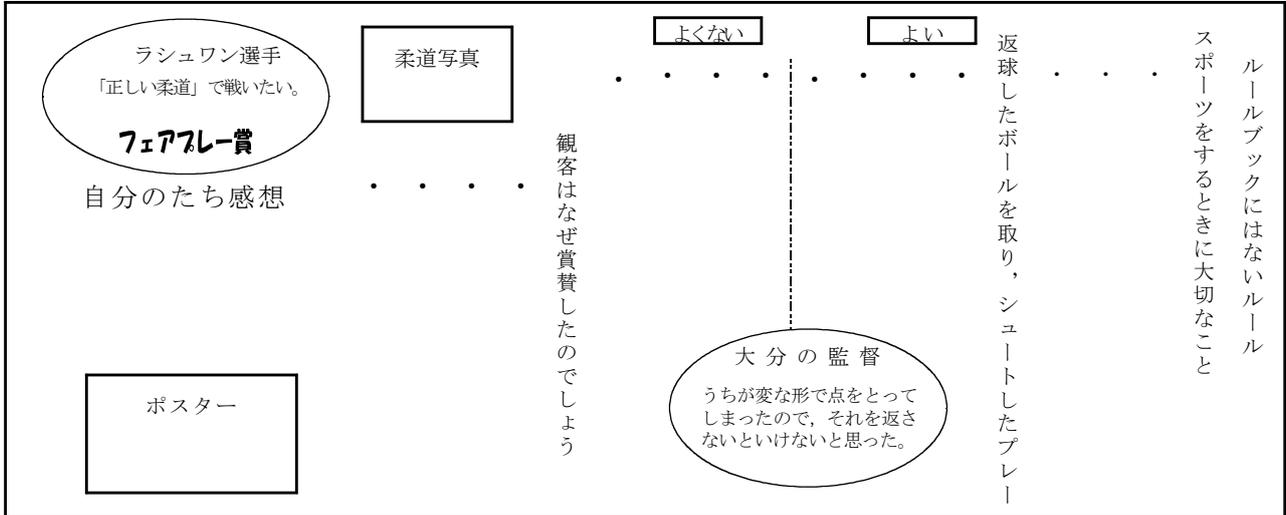
スポーツ選手のプレーについて考えさせることを通して、ルールとして明文化されていないことについても、公正・公平に判断し、行動しようとする心情を養う。

7 学習指導過程

	学習活動	主な発問(○)と予想される児童の反応(・)	支援(※)と評価(☆)
導入	1. 自分たちのスポーツの体験や思いを振り返る。	○みんなはどんなスポーツが好きですか？ ・ドッジボール ・ソフト ・フット ・サッカー，等 ○スポーツをするときに大切なことは何でしょう？ ・ルールを守ること ・勝つこと ・一生懸命すること・チームワーク ・審判に従うこと，等	※出された意見は肯定的に評価し，発言しやすいリラックスした雰囲気を作る。
展開前段	2. 資料Ⅰを聞いて話し合う。  ワークシートに自分の考えを書いた後，小グループで話し合い，さらに全体でも話し合う。	○ロドリゴ選手が，自分のチームの選手が相手チームに返球しようとしたボールを取って，そのままゴールを決めたプレーについてどう思いますか？ <b>よい</b> ・ルール違反はしていない。 ・真剣勝負だから仕方がない。 <b>よくない</b> ・せっかく治療時間をくれたのに卑怯だ。 ・相手が治療のためにボールを出してくれたのに返球をとるのは失礼。	※状況が把握しやすいように，黒板に図示しながら進める。 ※返球しようとしたボールに込められた思いを考えさせながら，ロドリゴ選手のプレーがルールに反してはいないものの，「公正・公平」の観点から見ると疑問が残る行為であったことに気づかせる。 ☆ロドリゴ選手のプレーについて自分としての考えを持つことができているか。 ※フェアなプレーが，尊重されるべき行為であることに気づかせるため，大分の監督が選手たちに出した指示や，試合後の言葉を紹介する。
展開後段	3. 資料Ⅱを聞いてフェアプレー，公正・公平とは何かについて考える。	○勝つことを目指すオリンピックの試合において，ラッシュワン選手の行為が賞賛されたのはなぜだと思いますか？ ・自分が勝つことばかりを考えないで，自分が正しいと考えた行動を取ったから。 ・相手のことを考えて行動したから。	☆フェアプレー，公正・公平の意味や大切さに気づくことができているか。

<p>終末</p>	<p>4. 自分たちの生活を振り返りながら、考えを深める。</p>	<p>○今日のお話の題名は、「ルールブックにはないルール」です。今日の学習で学んだことや自分のためになったことを書きましょう。</p> <p>○自分たちが、日頃スポーツをしているときに、ルールにはないけれど気をつけていることはありますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドッジボールで、相手にとって無茶な強いボールを投げない。</li> </ul>	<p>※自分の生活を振り返っているものや、公正・公平について記述をしているものを発表させることで、考える視点を明確にする。</p> <p>※お互いの感想を基に、もう一度、自分としての考えを深める。</p> <p>☆自分の生活を振り返りながら公正・公平についての考えを深めることができているか。</p> <p>※ポスター（AC ジャパン）を紹介して、次時へつなげる。</p>
-----------	-----------------------------------	---	--

8 板書計画



## 資料『ルールブックにはないルール』

### 〔資料Ⅰ〕

2003年のナビスコカップグループリーグ1回戦、京都対大分の試合でそれは起こった。

1対1のまま迎えた後半17分、大分の選手がけがのためピッチ上に倒れた。それを見ていた京都の選手が、治療時間を与えようとして、わざとボールをコートの外にけり出した。治療が終わり、プレーが再開し、大分の選手によるスローイン。大分の選手は、京都にボールを返そうとして、京都のゴールキーパーにパスを出したところ、近くにいた別の大分の選手（ロドリゴ）が、そのボールを取って、そのままドリブルしてシュートを決め、2-1となる勝ち越し点を取った。

その後、しばらくしてから、大分の監督の指示により、大分の選手はプレーを停止した。京都は無抵抗の大分の選手たちの間をドリブルしてゴール。2-2の同点となり、試合は振り出しに戻った。大分の監督は、この指示に関して、「うちが変な形で点を取ってしまったので、それを返さないといけなかった。」と話した。

### 〔資料Ⅱ〕

1984年のロサンゼルスオリンピック、柔道決勝戦でのことである。

決勝戦は、日本の山下泰裕とエジプトのラシュワンで行われた。

日本の山下泰裕は世界最強といわれていた。一方、ラシュワンの国エジプトは、それほど柔道の強い国ではない。ラシュワンはわざわざ柔道大国日本から先生を招き、練習に練習を重ねてきた。世界最強の山下を倒せば、エジプト、そして世界の英雄になれる。金メダルを取れば豪華な家、車…、あらゆる富と名誉が手に入る。そんな決勝戦だった。

山下は2回戦で右足を負傷してしまっていた。準決勝までは何とか持ちこたえたが、痛みはもはや限界に達していた。山下は、足を引きずりながら決勝の舞台に立った。

ラシュワンは山下のけがのことを知っていた。体重140キロもあるラシュワンが山下の右足を攻めれば…、結果は見えていた。コーチからも山下の右足を攻めろという指示が出されていた…。

しかし、ラシュワンはそういう戦い方を望まなかった。ラシュワンは山下の右足を狙わず真っ向勝負に出た。「正しい柔道で戦いたい」と思ったのだ。試合は、一瞬の隙をついた山下が、寝技横四方固めを決めて、金メダルを手にした。

敗れたラシュワンは、山下が痛めた足で一番高い表彰台に上がろうとしたとき、支えるように手を差し伸べたという。後に、ラシュワンにはユネスコからフェアプレー賞が贈られた。

※新聞記事「ウェーブ」（朝日新聞 平成15年3月12日付）及び、

Web ページ「[114の金物語](82)柔道・無差別級 山下泰裕」（MSN 産経ニュース 平成20年7月27日付）等を基に作成。